

公益財団法人
荒川区芸術文化振興財団
Arakawa City
Art Culture Promotion Foundation

▶ リンク集

文字サイズ

小

中

大

No.90 武蔵丸 光洋(むさしまるみつひろ)

「帰化でみんなの仲間に」

親しまれる人柄、お酒は弱い"西郷"さん

「あの時は緊張したよ。別の世界にいるようだった」。夏場所前にこのインタビューをしました。が、大関は四月中旬に橋本首相主催の昼食会で、クリントン米大統領夫妻と会った時の感激がまださめやらぬといった感じでした。

日本相撲協会の境川理事長(元横綱佐田の山)、東関親方(元関脇高見山)、横綱曙とともに招待されたのですが、「お相撲さんになっていなかったら、こんな経験もできなかったね」。ハワイのオアフ島にいた時は、アメリカ本土にも行ったことがなかったそうです。

高校時代に、ハワイにいる武蔵丸親方(元横綱三重ノ海)の知人に誘われたのが、大相撲の門をたたきかけになりました。「日本については、島国ということぐらいしか知らなかった」。相撲社会は上下の関係が厳しく、プライバシーもないところです。日本の若い人でもなかなかはじめず新弟子の五人に一人は、一年もたたないうちにやめていきます。

まして、言葉が分からず、慣習も違う外国人となれば、その苦労は並み大抵ではありません。「日本語は、部屋の人たちが話しているのを聞いて覚えた。一年ぐらいかかったかな。一つの言葉でいくつも意味があるので、難しかった。『はし』には、食事のときに使う箸とかブリッジ(橋)とかがあるでしょ」。

平成元年秋場所、十八歳で初土俵を踏んだ時には、十五歳の兄弟弟子がいました。「その人の言うことを聞けと言われ、何だと思ったね。でも、我慢したよ。寂しい時は一人で音楽を聴いていた」。

同じハワイ出身の東関親方も、つらかった新弟子時代のことをこう話しています。「目から汗が出たことがある。早く強くなりたいと思った」と。武蔵丸もそうですが、涙を流してもそう言わないのは、さすが勝負の世界に生きている人たちです。

食事はとくに苦労しませんでした。「梅干しも食べられるようになった。だめなのは納豆ぐらい。ただ、お酒は一杯でアウトだけど」。お酒が苦手とは、破壊力抜群の突き押し相撲を見せる、土俵上の姿からは想像もできません。

ところで、風貌といえば、西郷(隆盛)さんに似ているとよく言われます。そこで小結時代に西郷さんに"面会"しようと、上野の山に出掛けたことがあります。しかし、「人目につかないよう夜に行ったので、場所がわからなかった。そのまま(銅像を)見ないで帰ってきた」とか。

大相撲に入ってからのスピード出世は、ご存じの通りです。平成六年初場所後、大関に昇進し、東日暮里四丁目の武蔵川部屋に相撲協会の使者を迎えました。「日本の心を持って、相撲道に精進します」。その口上は印象的でした。

それから二年後の今年一月、日本への帰化が認められました。「武蔵丸光洋」。日本名は四股名と同じです。「みんなの仲間に入れてもらえて、うれしかった」。

けいこが終わって部屋の外でくつろいでいる時などに、近所の人に声を掛けられることがあります。「頑張れよとか、東京で優勝してパレードを見せてくださいとかね」。確かに全勝で初優勝したのは一昨年の名古屋場所、それ以後はちょっと足踏み状態が続いています。

地元の人たちが待ち望んでいるのは、優勝パレードはもちろん、横綱昇進を伝える使者を一日も早く迎えたいということでしょう。弟弟子の武蔵山も力をつけてきました。二十五歳。そろそろ「のんびり屋」は返上してもいいころです。

読売新聞記者・永島 武夫

カメラ・岡田 元章



トップ > 荒川の人 > No.90